

子どもの豊かな感性・思いやり・協調性を育む 自然とのふれあいを大切にする



ツアーの目的・趣旨、国内外の状況など

目的

本ツアーは、ドイツの先進的な保育・幼児教育の現場の視察、情報の提供を通じて「園庭ビオトープ」を普及・啓発し、日本における子どもたちの最善の利益を優先した保育・幼児教育の新たな展開に寄与することを目的としています。また、このことを通じた保育所・幼稚園の経営面での安定的な発展に貢献することを目的としています。

※ビオトープとは、地域の野生の生きものが生息する空間をさします。私たちの身近には、樹林や水辺、草地など多様なビオトープが存在しています。そうしたビオトープを子どもたちのために園庭に取り入れたものが「園庭ビオトープ」です。

趣旨

心とからだは急速に成長する乳幼児期は、豊かな感性や思いやり、協調性、創造力などをはぐくむ大切な時期です。そうした才能や素質は、花の香りをかぎ、葉ずれの音に耳を傾け、そよぐ風を感じ、土の感触を味わい、様々な生きものと出会うなど、五感を通じて自然とふれあい、自然の美しさや不思議さを他者と共有することで発達します。「園庭ビオトープのある園」は、自然とのふれあいが安心してできることから、子どもたちが毎日を過ごす場所として適しています。また、保護者の評価も大変高く、日本においても入園希望者が増加しています。

こうした動向を踏まえ、当協会では、「全国学校・園庭ビオトープコンクール」の実施や「こども環境管理士」・「ビオトープ管理士」認証資格づくりなどを通じて、自然とふれあえる保育の場づくりの後押しを行ってきました。その一環として、海外における参考事例をご紹介します本ツアーは、保育所・幼稚園などの施設経営者や保育者の方々などより、毎回大変ご好評をいただいています。

2018 年度は、南ドイツに位置するバイエルン州のミュンヘンなどを訪れ、自然景観設計士（日本で言うビオトープ管理士）が設計し、保護者と力を合わせてつくった園庭など、自然体験を目的とした園庭ビオトープなどを見学します。あわせて、州政府の自然体験センターや森の幼稚園も訪れます。加えて、州政府機関にて、自然とのふれあいを促す保育や幼児教育のしくみ、子どもへのプラスの効果などを解説していただきます。

子どもたちが置かれている環境

子どもたちは、近年ますます多忙な環境に置かれるようになってきました。外遊びより室内で過ごす時間が増えることで、自然とのつながりが希薄になる一方、現代的な既製のおもちゃやゲーム機、スマートフォンなどに依存する傾向が強まっています。こうしたことは、体力・運動能力の低下をもたらすとともに、子どもの排他性を高めてしまう可能性があります。自然のなかに身を置き、そこにあるものを使って様々に工夫して遊ぶことが、体力・運動能力の向上を促し、考える力を養い、将来の人となりや物事の価値観を決定する重要な鍵を握っています。このことから、幼児期における自然とのふれあいは、私たち人間にとってなくてはならないものだと言えます。

ドイツの状況

2002年、国連ヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本政府とNGOの共同提案により、「国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」が採択されました。2005年「国連ESDの10年国際実施計画」(2005年～2014年)が策定され、世界各国にその推進が呼びかけられました。2014年以降も持続可能な開発のための教育の更なる推進が求められています。こうした世界的な流れのなかで、人格形成上最も重要な幼児期に、協調性や豊かな感性、健康な体、新しい時代にふさわしい考え方や行動などを育むため、野生の生きもの、水、土、太陽の光を重要視して、園庭や園舎を見直す動きが進んでいます。

自然や環境保護への意識の高いドイツでは、地域在来の植物を園庭で育てるなど、身近な生きものたちとの日常的なふれあいを促す園づくりが盛んで、政府も様々な取り組みを通じて奨励しています。連邦政府が全国規模で進める、生物多様性条約関連のプロジェクト「保育所幼稚園の園庭 一緒に多様性を発見しよう (Kinder-Garten im Kindergarten - Gemeinsam Vielfalt entdecken)」は、絶滅の危機にある多様な野生生物に対する保護の意識を幼少期から育てることをねらいとしており、現在国内約200カ所以上の保育所幼稚園が参加しています。

加えて、共生社会の形成に向けたシステムの構築も進んでいます。インクルーシブ保育・幼児教育は、障害の有無や、年齢、性別、人種・言語・文化・宗教的背景の違いにかかわらず、一緒に遊ばせながら、子ども一人一人の保育・教育的ニーズにあった支援を行うものです。また、保護者イニシアティブは、園の運営なども含めて、保護者と連携して行うものです。インクルーシブ保育・幼児教育は、子どもたちの他社への理解を深め、思いやりの心や助け合いの精神を養うのに役立ち、保護者イニシアティブは、連携を通じて、保護者の信頼や様々な協力を得るのに役立っています。

日本の状況

日本においても、環境を通して行う保育・幼児教育の重要性が強く認識されています。例えば、厚生労働省が策定した「保育所保育指針」(2008年改定)のなかでもその重要性が指摘されており、保育所における保

育の基本は環境を通して行うことだとしています。また、乳幼児期の子どもの成長に最もふさわしい保育環境をいかに構成していくかが、保育の質に関わるものであることを保育者等が自覚しなければならないとしています。子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるようにすることが重要であるため、保育者等が保育所の自然環境などを生かした環境を構成することが求められるとしています。

日本生態系協会(視察企画・協力)

(公財)日本生態系協会は、自然と歴史が共存する美しいくづくり・まちづくりを目指して活動するシンクタンクです。私たちの生存基盤である自然生態系を守り、経済、社会、文化のあり方について国内や海外の情報を広く集め、国際的な視点からも調査研究を進め、市民や議員、政府機関等に提案を行っています。また、『全国学校・園庭ビオトープコンクール』の実施、園庭ビオトープづくりやその活用など自然体験・環境学習の推進、国際シンポジウムや各種セミナーなどの開催、こども環境管理士およびビオトープ管理士の認証、書籍の発行など、多岐にわたる取り組みを行っています。主な著書に、『学校・園庭ビオトープ 考え方・つくり方・使い方』(講談社)、『環境教育がわかる事典』(柏書房)、『ビオトープネットワーク』(ぎょうせい)、『にほんのいきもの暦』(KADOKAWA)などがあります。

視察企画・協力



171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル
TEL 03-5951-0244 FAX 03-5951-2974 <http://www.ecosys.or.jp/>